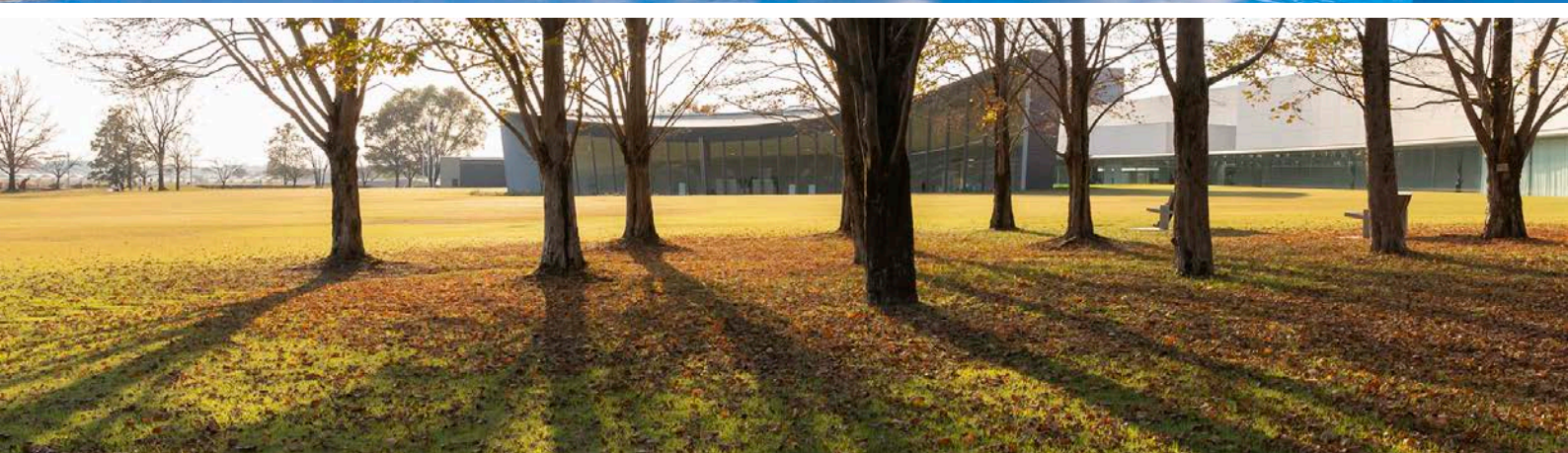
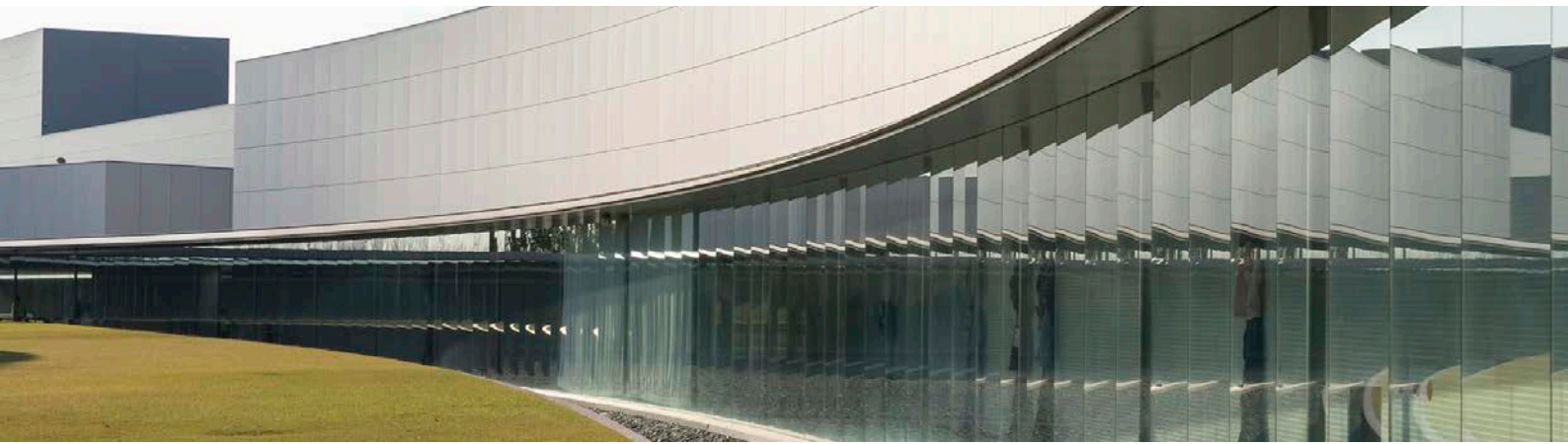




# たてびレポート

—開館 20 周年を楽しむ展覧会—  
記録集



## 謝辞

本展覧会を開催するにあたり、ご出品いただきました作家の皆様、ご教示、ご協力いただきました関係各位、またここにお名前を記すことのできなかった方々に心から御礼申し上げます。（敬称略・順不同）

安部泰輔	館林市文化会館	株式会社共和
小瀬村真美	館林市三の丸芸術ホール	株式会社クサカベ
星素子	館林市第一資料館	株式会社誠和製作所
山口晃	館林市第二資料館	日鉄ステンレスアート株式会社
渡辺香奈	田山花袋記念文学館	丸富製紙株式会社
	茂林寺	山岸織物
ミヅマアートギャラリー	群馬県立多々良沼公園	
スカイザバスハウス	館林市中部公民館	長田実穂
	館林市三野谷公民館	久保貴史
新井昭彦	館林市渡瀬公民館	しでかすおともだち
大石真隆	館林市西公民館	本間亮
名原幸一	館林市多々良公民館	
新田安紀芳		
	館林市立第一小学校	
館林市日本遺産プロジェクト	館林市立第五小学校	
（教育委員会文化振興課）	館林市立第十小学校	
館林市地球環境課	館林市立美園小学校	
館林市つつじのまち観光課	館林市立第一中学校	
館林市経済部商工課	館林市立多々良中学校	

## はじめに

「たてびレポート－開館20周年を楽しむ展覧会－」は、2021年9月18日から11月7日まで開催されました。この展覧会は、群馬県立館林美術館の開館20周年を記念した展覧会として、新収蔵作品を含むコレクションの紹介を中心に、地域と連携した参加型作品を制作する作家の展示なども盛り込み、美術館のこれまでと現在、これからについて考えることを目指しました。

この記録集では、本展の展示や活動の様子をお伝えいたします。

## もくじ

たてびレポート－開館20周年を楽しむ展覧会－を開催して	熊谷ゆう子	-----	3
第1章	テーマで迎える、美術館のこれまで	-----	4
第2章	コレクションに加わった山口晃《深山寺参詣圖》	-----	6
第3章	群馬県立館林美術館アーカイブ、Twitter企画、印刷物	-----	10
第4章	美術館の今 アートを楽しむ 安部泰輔 ハヤシガモリ	-----	12
第4章	美術館の今 アートを楽しむ 星素子 館林バトン&エアハグ	-----	20
出品リスト	-----		28

## たてびレポート-開館20周年を楽しむ展覧会-を開催して

群馬県立館林美術館は2021年に開館から20年を迎えた。前年から続く新型コロナウイルス感染拡大の脅威により、周年記念として大規模な自主企画展を開催することは難しく、予定していた2本の巡回展(うち1本は当館のまとまったコレクションにフランスの美術館の作品を多数加えた「フランソワ・ポンポン展」)以外は収蔵作品による展覧会を開催することとなった。春に開催した1本目の展覧会では「水に浮かぶ島のように」<sup>1</sup>と題し、主な収蔵作品を美術館のテーマである「自然と人間とのかかわり」から5つの章に分けて紹介した。その際、20年の歴史をまとめた小冊子や、これまでの歴史を振り返る動画を作成した。スタンダードにコレクションを紹介した同展に続き、秋開催の本展では、コレクション+αとして、アートを気軽に楽しめるような作家の作品展示を盛り込んだ展覧会を目指した。

本展は4つの章で構成されている。収蔵作品や資料などでこれまでの美術館活動を振り返り、さらに新収蔵作品によりコレクションの広がりやこれからを考える機会とした。そして参加型作品によりアートや美術館に関わる地域や環境について思いを馳せようという、少々盛り沢山な内容となった。第1章では収蔵作品と寄託作品による当館のテーマである「自然と人間とのかかわり」から、具体的なモチーフの「生き物」、「人」、「植物」に分けて作品の紹介を行った。第2章では、本年度に新収蔵となった群馬県ゆかりの作家である山口晃の《深山寺参詣圖》の収蔵後初披露の機会として、特集展示を行った。コロナ禍のため、リモートで作家にインタビューを行い、作品の意図や制作の背景など制作時を振り返る話を伺い、パネルや動画で紹介した。また、2013-14年開催の個展で新作された上毛カルタを元にした《偽史和人伝中茸取物語》を作家から借用し、当時は会期中に完成した本作を改めて展示、あわせて著作やポスター等の資料も紹介した。第3章では「群馬県立館林美術館アーカイブ」として、当館がこれまで開催した展覧会のポスターを全て掲示するとともに、カタログやジュニアガイドなどの主な印刷物も展示し、これまでの活動を振り返った。最後となる第4章では、参加型作品を制作する作家による、地域や美術館をテーマとした大がかりなインスタレーション作品の展示を行った。

第4章にもう少し触れておきたい。本展開催の構想を進めた2020年は既にコロナ禍にあり、開催予定の時期の世の中がどうなっているのか、全く想像できない状況であった。好転を期待しつつも、感染対策に配慮可能な楽しめるアートという観点から、参加者の個別活動に

よって作品を形作ることのできる作家として、以前に群馬県立近代美術館での活動で関わりがあった二人の作家に出品を依頼した。古着を素材としてぬいぐるみなどの作品を制作する安部泰輔は、2009年の「まいにちアート」で滞在制作を行った。その際は群馬県立近代美術館の収蔵作品を古着で再現した作品を制作し、触れられる作品として人気を呼んだ。また安部によるキャラクターのバッジは、展覧会の枠を超えて、美術館の外の世界へアートを連れ出すツールとなった。安部はその後、参加者が描いた絵をぬいぐるみとして制作するワークショップを開発、定番化しており、今回の展示ではそのワークショップを中心にすることとなった。星素子は2014年に行った群馬県立近代美術館ボランティアの20周年記念イベントで、星が開発した「素ことば」のワークショップを行った作家である。言葉によるアート活動は、世代を超えて集まっていたボランティア活動者たちの記念イベントを大いに盛り上げた。その後、2019年の中之条ピエンナーレなどでは、ロール芯に言葉を表現したバトンに参加者から集め、インスタレーション作品を制作する活動を行った。本展はこのバトンの活動を中心に実施することとなった。

二人の展示活動では、地域との連携活動が大変重要な役割を果たした。特に星の活動は、学校や地元の公共施設を会場としてバトン収集を行う必要があった。館林市は市内にある茂林寺沼、多々良沼、城沼が2019年に日本遺産に認定<sup>2</sup>されており、地域資源として取り上げる良いタイミングでもあったので、地域を盛り上げる一助になることを目指し、市の日本遺産プロジェクト(教育委員会文化振興課)に協力依頼を行った。今年7月に追加認定<sup>3</sup>の対象となった館林紬も安部と連携した。

他にも周年を楽しむ雰囲気が高めることを目指し、Twitterを利用した企画を実施するなど、本展はこれまで当館ではあまり行っていなかった試みにも挑戦した。コレクション展に来館者が楽しめる要素を加えたいといところから始まった展覧会だったが、参加型作品を制作する作家による地域と連携した展示活動を行ったり、SNSの活用など、20年を経た群馬県立館林美術館にとっても、これからの活動の幅を広げるきっかけとなる展覧会にすることができたのではないかと考えている。

熊谷ゆう子(当館学芸員)

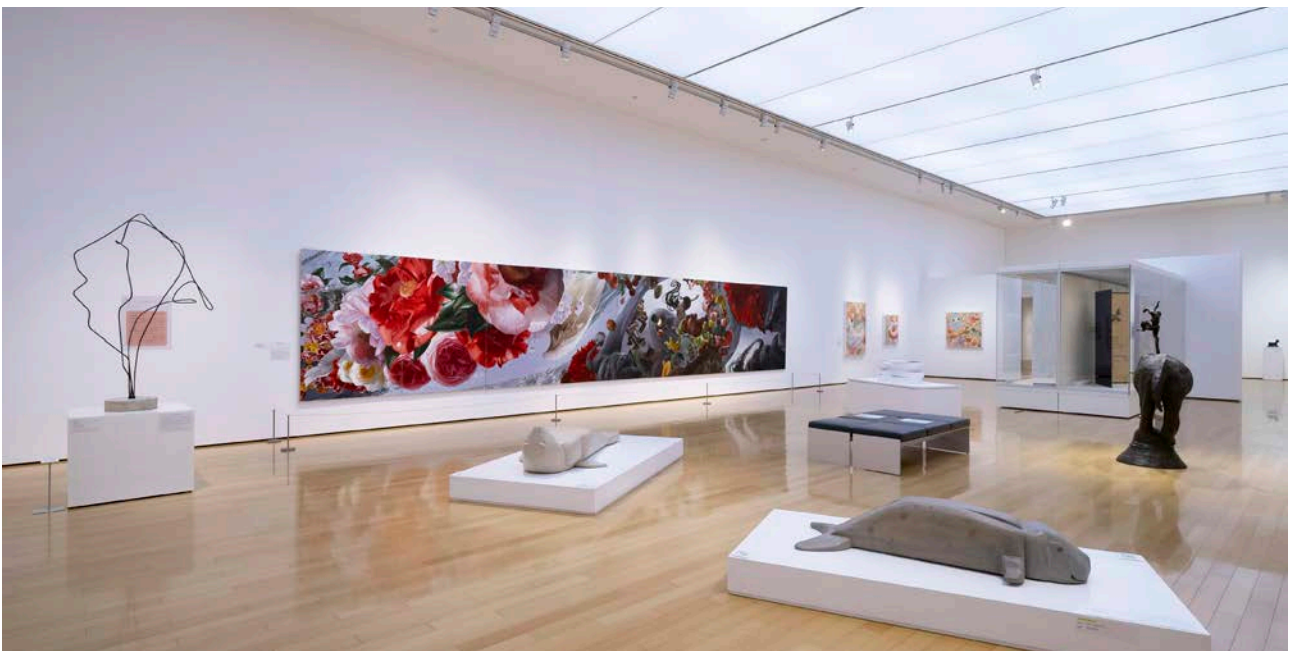
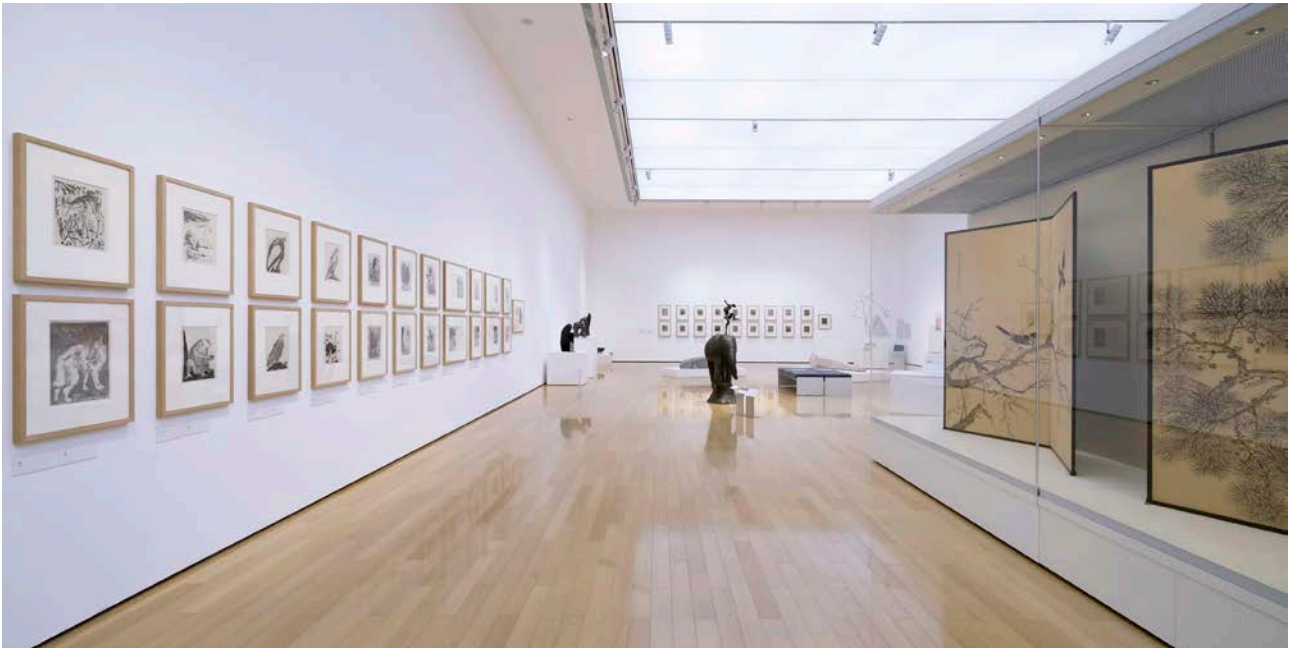
1 4月26日～6月13日開催だったが、群馬県のまん延防止等重点措置適用により5月15日で休館となり、そのまま閉幕した。

2 「里沼(SATO-NUMA) - 『折り』『美り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化 - 」として認定された。

3 「蛇沼及び間堀遺跡出土品」、「近藤沼」、「長良神社と館林城下町の総構え」、「織姫神社と館林紬」が認定された。

## 第1章

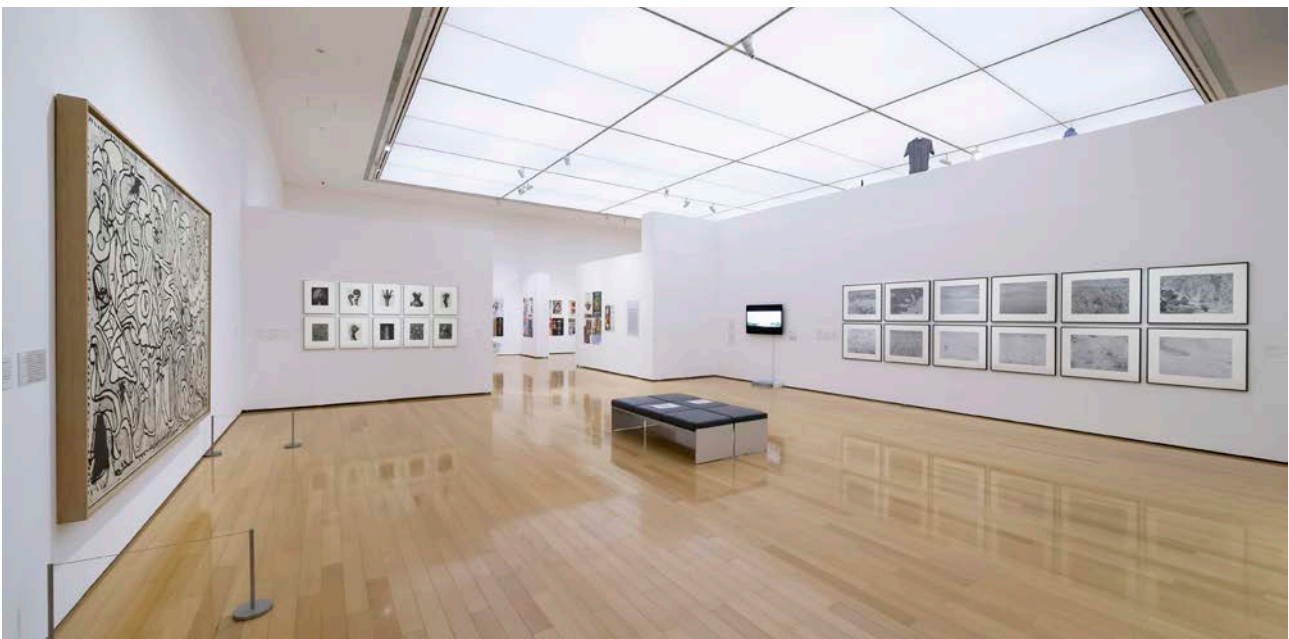
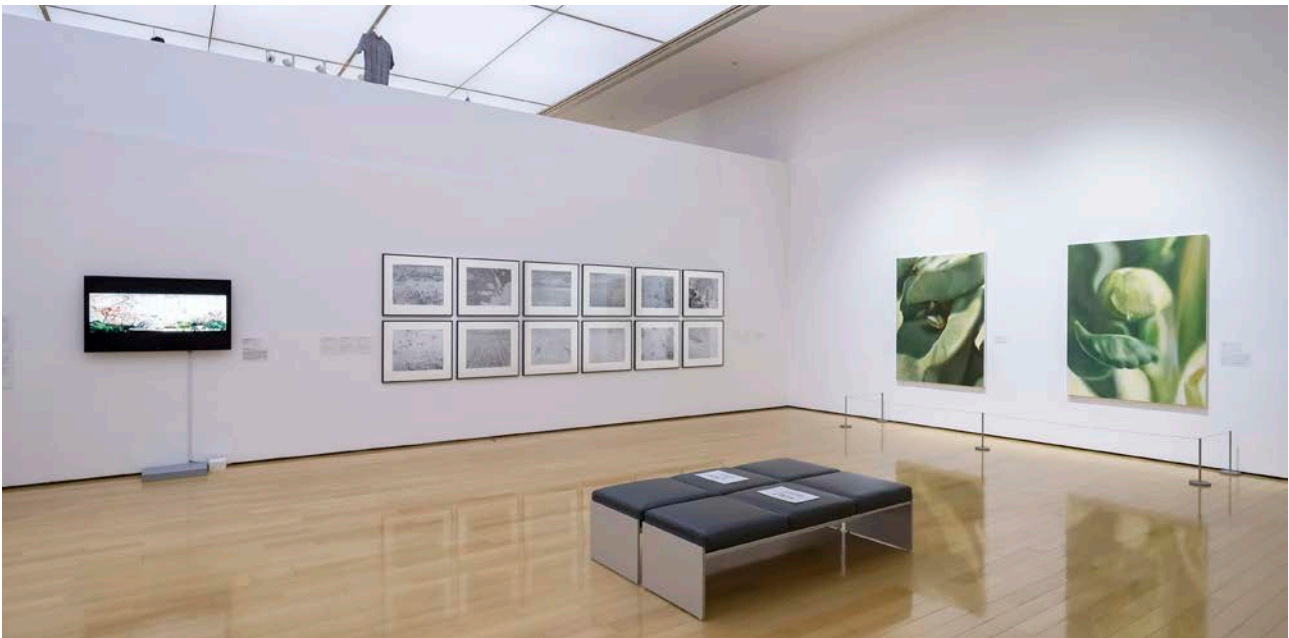
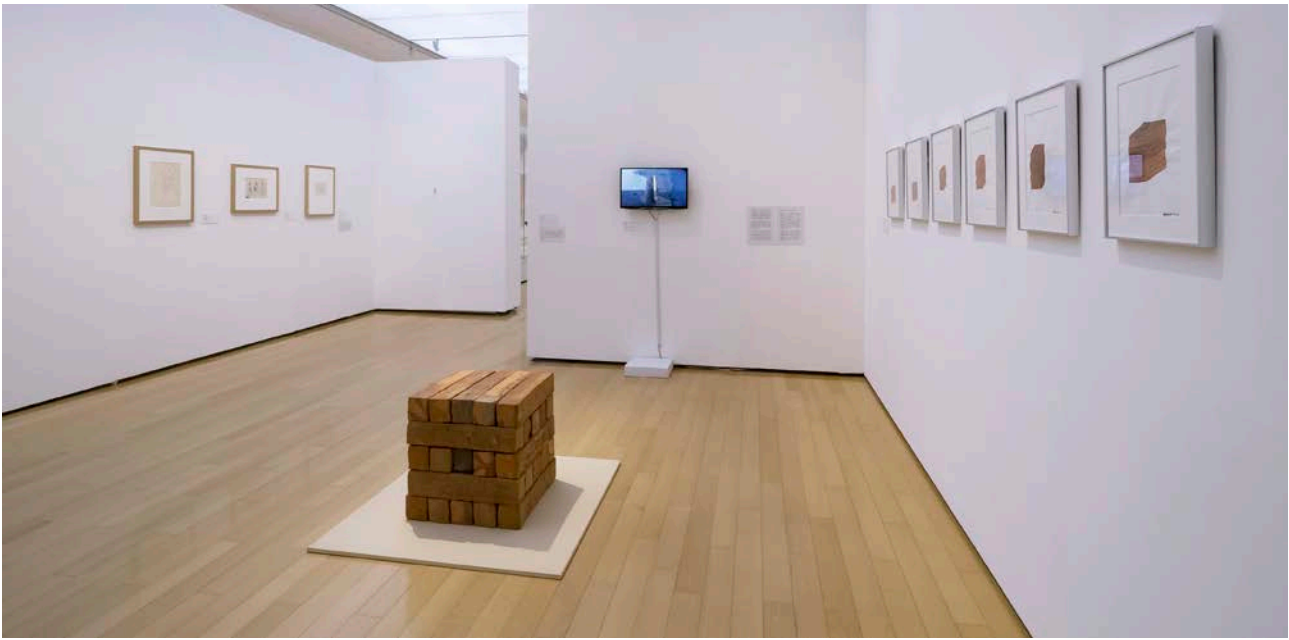
# テーマで巡る、美術館のこれまで



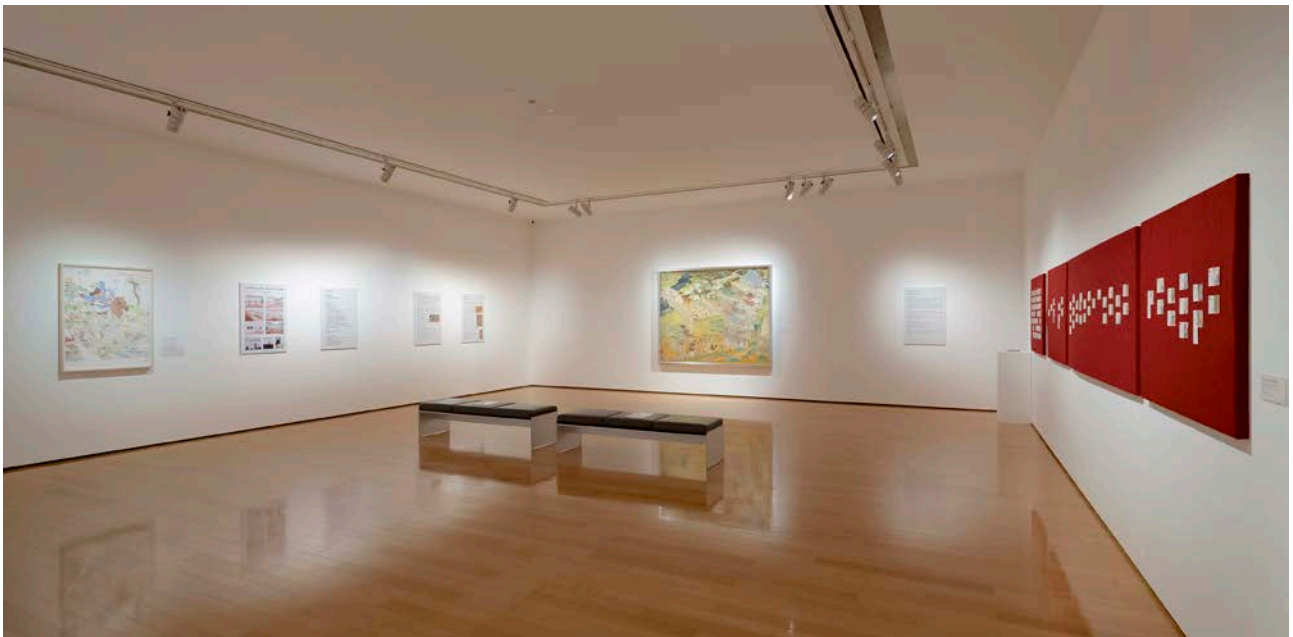
当館は2館目の県立美術館としてテーマ性のある特色を出すため、当初は親しみやすい動物や人、花といった具体的なモチーフの作品を収集し、最終的には、「自然と人間とのかかわり」という、より広いテーマを掲げて開館し、作品収集や展覧会の開催などを行ってきた。第1章では美術館のこれまでを巡るため、生き物を表現した作品、人の姿や人に関することを表現した作品、植物や風景などの自然を表現した作品という3つの視点で紹介、収蔵作品と寄託作品で構成した。

はじめの「生き物の表現」では、当館コレクションを代表するフランソワ・ポンポン、ヘンリー・ムーアやバリー・フラナガン、イサム・ノグチのブロンズ彫刻、三

輪途道やエマニュエル・コランの木彫作品により、立体で表現される生き物の世界を紹介した。また、ヘンリー・ムーア、パブロ・ピカソ、ラウル・デュフィの版画集をまとめて展示した。次の「人について」では、渡辺香奈、ロッカクアヤコ、KYNEによる女性を表現した作品を紹介した。また人の内面世界を探求した清宮質文や、手作りのレンガを来場者が持ち帰ることで変化する作品を発表したボスコ・ソディの作品など、人についての幅広い表現を展示した。最後の「自然の表現を巡って」では、カール・ブロスフェルトによる植物の写真や、小瀬村真美による草花の動画など、植物や自然の景色などを様々な手法やコンセプトにより表現した作品を紹介した。



## コレクションに加わった山口晃 みやまでらさんけいず 《深山寺参詣圖》



美術館のコレクションは、美術館の活動とも深く関わって成長していくものである。

今年度、当館では、群馬ゆかりの作家である山口晃の絵画《深山寺参詣圖》(1994年)を新収蔵した。この作品は、作家の東京藝術大学の卒業制作作品で、長らく個人の方の手元で大切に所蔵されてきた。当館では、2013～14年に「山口晃展 画業ほぼ総覧—お絵描きから現在まで」を開催、その時にこの作品が卒業制作展以来、初めて展覧会に出品される機会となった。

勢いよく雲が降りてくる鳥瞰的な空間に、様々な時代様式の建築が緻密に重なり、古今の人々が生き活きと行き交う様を描いたこの絵は、作家が日本の油絵の歴史の刷新をと意気込み、行き詰まった後、自身の原点であるお絵描きを糸口としながら、「ともかく日本の絵に身を浸して体得することから」と挑んだ大作である。

収蔵後、初公開となる今回の展示では、作家に27年前を振り返って話を伺ったインタビューの記録もパネル

で紹介した。

また2013年の個展を振り返り、当時新作として生まれた《偽史和人伝中茸取物語》をあわせて再展示した。この作品は、個展を企画担当した学芸員からの「群馬に因んだ作品を」との依頼に応え、群馬県民であれば誰でも知っている「上毛かるた」をモチーフに、「群馬県民と県外の人の温度差を埋める」ことを意図して作られたものである。視覚的なイメージや物事の関係性を鋭い視点と独特のユーモアで捉える山口ならではの遊び心あふれた作品であることが、作家インタビューからも知ることができた。

本展会場では山口晃の展覧会カタログや書籍、東京パラリンピックのポスターなども展示し、作家の幅広い活動の一端を紹介した。また展覧会を機に、今回の作家インタビュー動画の一部を組み込んだ作品紹介の動画も作成、群馬県のYouTubeサイト「tsulunos」に公開した。

## 山口晃インタビュー記録1

### 《ぎしわじんてんのうちたけとりものがたり偽史倭人伝 中 茸取物語》(2013年)について

#### ● どのような意図で作られましたか。

こちらでの個展の時に「群馬に因んだ作品も一つお願いします」と学芸員の方に依頼されて色々考えたんですけども、あちら立てればこちらが立たずでなかなか群馬全体に因むものというのは無い。で、そんな思案の断片が集まったものを見ていたら、あれ、上毛カルタで済むなど思い当たりました。ただ、ご当地物というのは地元の人間とそれ以外の人間の温度差がすごいわけですね。その温度差をどうにかしようというところが第一にありました。そこで、絵札の並び順によって喚起されるストーリーを作って、絵札と共に並べ、その後に読み札を並べるということをし、カルタであることや郷土の歴史であることを一旦棚上げする方法を考えました。

それによって、慣れ親しんだ人には、既知の絵札がストーリーによって全く異なる情景に見えてくる転換の妙を体験し、改めてカルタを見直す機会となり、また、カルタを知らぬ人には、物語の挿絵と見えたものが実は元からある絵札で、ストーリーこそ副次的なフィクションであるという逆転の妙を体験し、初めからカルタとして提示されていたなら、さして興味を持ってぬかもしれなかった読み札にある他郷の歴史が、どんでん返しの答えとして、好奇心を持って読まれる対象となる、といった辺りを意図して作りました。

#### ● なぜ絵札ではなく読み札に介入されたのですか？古い群馬の建国、歴史のお話にされた意図は？

とにかく上毛カルタを押しだすというのがありましたから、基本的にカルタは読み札も絵札もいじらない。とにかく受け手からの距離を変える。あれに親しんだ人からも、親しんでいない人からも、違う距離にあるものを一つ作ることによって、その価値体系とか、自分からの近さというのを再構築させる。なので読み札に介入するのではなく、絵札、読み札に続く第三点をつくることをしました。で、第三点は偽史と断ったフィクションとして逸脱はしつつも、群馬に収斂していくような作りにしたかったんですね。普遍的な神話的な作りにして、群馬県固有のものから民族固有のものみたいなところに一度ひろげて、それが群馬県にまた戻っていく、という構造になれば良いかと。

#### ● 絵の並びは最初に決められましたか？

そうですね。どうやったら全部の絵札が一つにつながるかを、小さなシーンを見つげるところから始めました。例えば、トンネルの描かれた札の後に湖の札を置けばトンネルを抜けて湖に至るシーンができるなという風に、

シーンを構成出来るような数枚の組み合わせが先に幾つか出来てくる。そういうのをぼんやり眺めているうちに大筋が浮かび上がってくるといった具合です。

絵札を余らせぬよう、物語が弛緩しないよう、クライマックスを持ってこられるようになど、ずいぶん腐心した記憶があります。

#### ● 絵の優しさと古文調の言葉のギャップは不思議ですが、意図するものがあったのでしょうか。

読み札の面積に限りがありますので、散文にすると収まりきらないんですね。端的に短くと思って書いていたら、ああした妙な文語調になったというのはあります。昔めかしたストーリーに合わせたというのももちろんありますが。



《偽史倭人伝中茸取物語》(部分)

## 山口晃インタビュー記録2

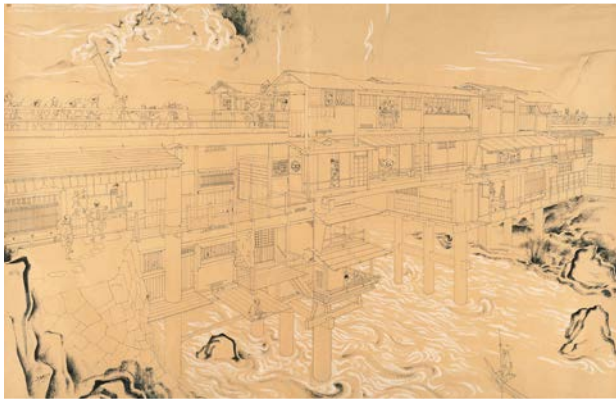
### 《深山寺参詣圖》について

#### ● 大学卒業制作の作品ですが、実際にはいつ頃から準備に取りかかれたのでしょうか。

4年生になってからだと思います…消失点のある遠近法で描かれていない絵を試そうと思ったのが、大学3年の時ぐらいになると思うんですね。

#### ● 参詣というテーマとは、どのようなところから導き出されたのでしょうか。

3年生の時に《たいしきょうずえ大師橋圖畫》というのを描いており、その大師橋という橋を渡った人たちがどこかに参詣する、たどり着く先としての深山寺というのだったんだと思うんですね。御本尊は大師なのか、どの大師が奉られているのかという…そのへんはあまり主眼をおいてなくてですね。むしろ建築の構造の方に主眼があって…建築様式が古いものほど下にあって、各時代に作られたものがどんどん上に積み重なった様子を絵にしたいというのがあった。そうするとまあお寺っぽくなるなというので、参詣圖というタイトルをとったんだと思います。



《大師橋圖畫》1992年 ペン、油彩・紙  
 撮影：長塚秀人 ©YAMAGUCHI Akira, Courtesy of Mizuma Art Gallery

●絵の右側の建築は、一番下は唐招提寺…一番上は清水寺がモデルでしょうか？

そうですね、見るからに、唐招提寺<sup>1</sup>で。入母屋になっている妻部分<sup>2</sup>が冢扱首<sup>いのこさす</sup>という扱首の入り方ですね。

(その)上<sup>3</sup>が、(東大寺)三月堂の古い形態…拝殿と本殿がまだ分かれている頃。そこに両殿を結ぶ屋根がかかりつつある形を想像して描いています。平安の頃。

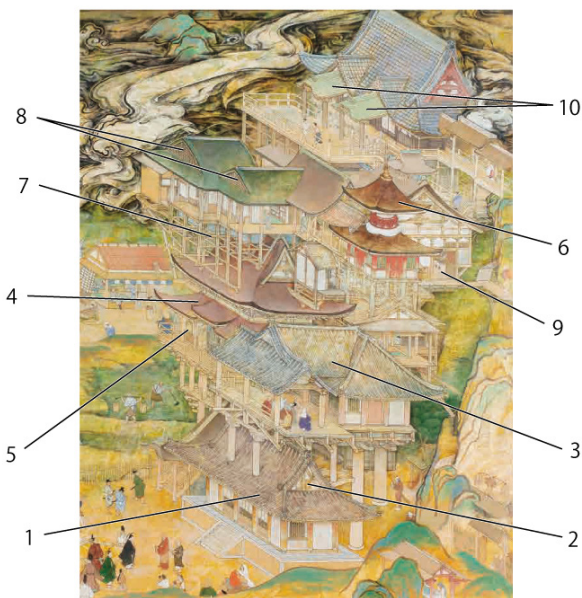
その奥の檜皮葺<sup>ひわだぶき</sup>っぽい建物<sup>4</sup>は、華灯窓<sup>かとうまど</sup>がはいってますので禅寺。鎌倉になって。

多宝塔<sup>6</sup>がもうちょっと後、室町あたりの感じ。多宝塔は、相輪を描く前に時間が来ちゃったんですね。てっぺんのところを描いてないですけども。

奥の緑がかった屋根のものは、桂離宮の新御殿なんかイメージされている…その通りではなくて。懸け造り<sup>7</sup>になっていて…破風<sup>8</sup>は狐格子<sup>きつねごうし</sup>になっています。

向かって右の方が庫裡<sup>くりり</sup>、台所ですね。屋根の上の小さい屋根は煙抜きです。

一番上ですが、このモデルは実は谷中にあるお寺さんです。入母屋の平入り側に破風<sup>いりもや</sup>が二つ並んでおりまして、更にそこから銅製の唐破風<sup>からばふ</sup><sup>10</sup>がにゅっと出ており、



《深山寺参詣圖》(部分)

それぞれに確か違うご本尊が奉られてる。

●絵の左にある構造物は山口さんの想像上のものでしょうか。

(この)太い柱が全部御柱なんですね。代々の御柱が残っていて、事後的に屋根が架けられて…(寺院建築によって)神社のそれまで空間だった所に、本尊的に神体と呼ばれるものが入ってきて、かつての中心の「虚」が周辺に追いやられている。たぶんそういうものとして描いていたはずですね。ただこういう組み物を構造を考えながら描いてゆくの、自分としてはぐっとくると思いますか、まあ、たまらなく楽しいわけです。

天辺の赤い鳥居の足元あたりから出ている横材が、ちょっとだまし絵になっているんですね。ペンローズの三角形的な。大和絵の桶の付いた水車の描写なんかにあるねじれ…その辺を錯覚的に描いている。

まあまあ、門というか、鳥居というか、なんとも名付けようのないものとして描いたような記憶があります。



●日本の古い絵にならって描かれたのはなぜですか。描いてみてどのような感覚を得られましたか。

大学の時に一度、絵に行き詰まった時がありまして…西洋美術を学ぶことに内発性をみだせなくなったんですね。かと言って日本美術の素養がある訳でもない。自分が結局は現代人のお絵描き少年だったんだな、ということがわかった時に、日本の古い絵っていうのが非常にインパクトのあるものとして、目の前に現れてきた。要は、デッサンのもの、透視図法的なものを習っている時は、全部それはやっちゃいけないと言われたことが日本の絵においては行われていて、しかも絵が恐ろしく強いんですね。そういうものの末裔にこそなるべきだと思ったんでしょうね。で、素養が無いのだからその中に身を浸して実感することから体得していこうと。

日本の古い絵に共通する部分を見ていったときに、線遠近法を使わずパースがつかない、影、陰が無い。多くの流派時代で雲、霞みたいなものが俯瞰で描かれている。そのあたりが自分には非常に大きな違和感を持って写ったものです。違和感を持つということは自分に無い部分だからで、そういうものこそ実践してみようと思った訳です。線遠近法を使わないで描いてみると自分も混乱す





山口晃《深山寺参詣圖》  
油彩・カンヴァス 1994年



インタビュー中の山口氏

るといいますか、どうしても奥に行くに従って形をすぼめとしまふ。パースを自然とつけてしまふのを、いちいち平行まで引き戻すのが、非常に気持ちの悪い作業でしたね。

● 油絵具はどのような意識で使われたのでしょうか。

日本の古画に倣うのなら画材もそれに倣うとなりそうですが、そこは表層に倣わずに構造に倣うようにしました。つまり先達が大陸から渡ってきたものを咀嚼してきたように、比較的新しい素材である油彩の、古画の画面構造に沿った変容のさせ方がまだあるのじゃないか、という部分を探求する心持ちで油絵具を使っていたように思います。

油絵具の、不透明層を透明層で挟み込むことで、大気の厚みを取り込んだような深みが表現できることや、上に重ねる層の不透明層度合や、覆う筆致によってどう下地を見せるかといったところなど、あれこれ試している様が見えます。

● 雲の描き方について。この後で山口さんの多く描かれる金雲の平面的な描き方と全く違います。なぜこのような描き方をされたのですか。



そうですね…なんかこっちのほうがいいですよ(笑) 昔の方が画材に素直に…自分の生理的な部分に正直にやっているとこがある。

色々なタイプの雲が日本の古い絵にも出てきますけども、例えば金雲的なもこもこした雲、護法童子がびゅーっ

と飛んでくる、非常にスピード感のある雲、来迎図なんかにあるような群れ集ってくる群雲、そういう、動きのエッセンスだけ飲み込んで、あとは我流でえいやとやった良く解ってないが故の大胆さがある。

墨絵の片暈<sup>ぼか</sup>的な、際と、輪郭線<sup>きわ</sup>が空間になり、空間がまた輪郭線に戻ってくる、ちょっとキュビズム的な際の処理みたいなものがここでは呼び合っている。

感覚的に、形で思考しているんですね。

またこれ試してみてもいいなと思いました(笑)

● 人物を描く時は会話や物語を想像しながら描かれるのでしょうか。

物語を考えてそれに沿って描くのではなく、場所の性格をまず確定していく。すると、その場所で起こるであろう出来事というのが自然と見えてくる。人がその空間に置かれた時に、その人なりのポーズを自然と取り出すっていうんですかね。その人物に憑依すると言いますか。

…最後の最後まで考え尽くしたものでやると、硬くなるんですね、絵が。

手ずから厳密に据えつけるのではなく、とり落としたものが自然とそこに転がり着いて止まったようにしてあげる。自分の手から離れる部分っていうのを作ってあげないと、ものというのは豊かにならない、含むものが少なくなるんですね。

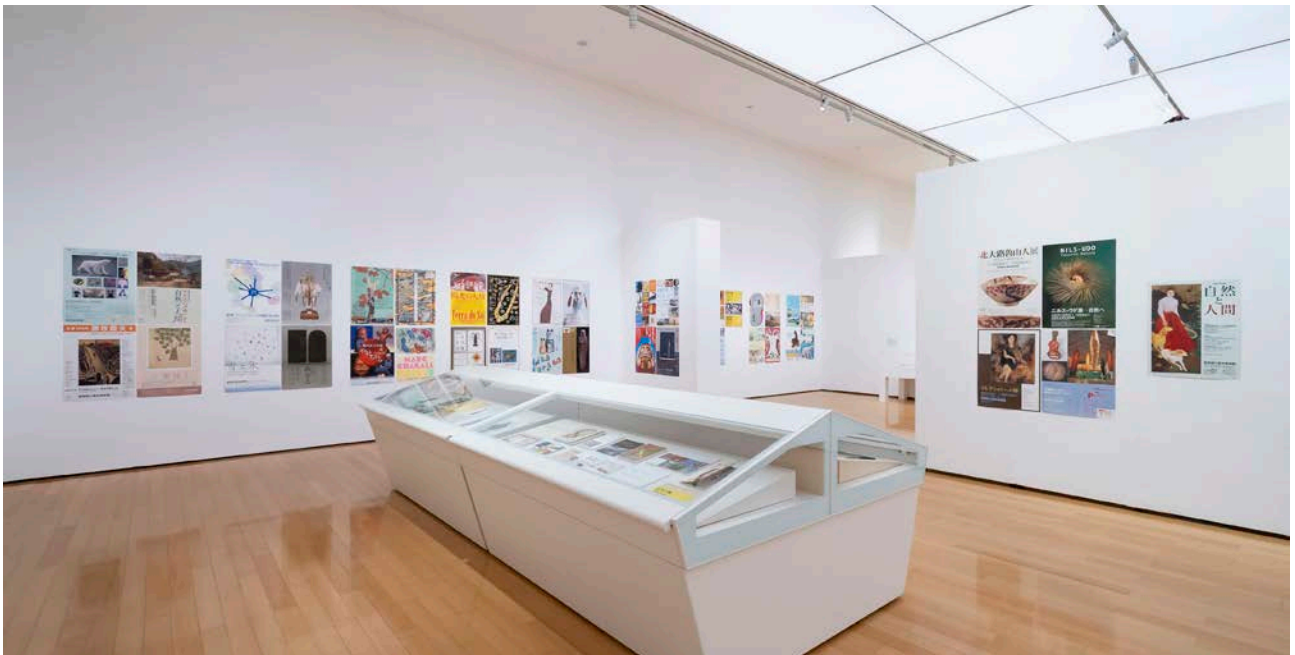
● ところで、リュックを背負った人は山口さんご自身と断言していいのでしょうか。

ええ、これ、そうですね。なぜか群衆を描くと聞かれたんですよ、作者はどこかにいるの？みたいに。何度も聞かれて面倒なのであらかじめ描いとくかと、ある時から入れるようになった気がしますね。もともとそんな気は無いので最近では全然描き入れませんけども。

インタビュー：2021年6月22日 聞き手：松下和美(当館学芸員)

### 第3章

## 群馬県立館林美術館アーカイブ

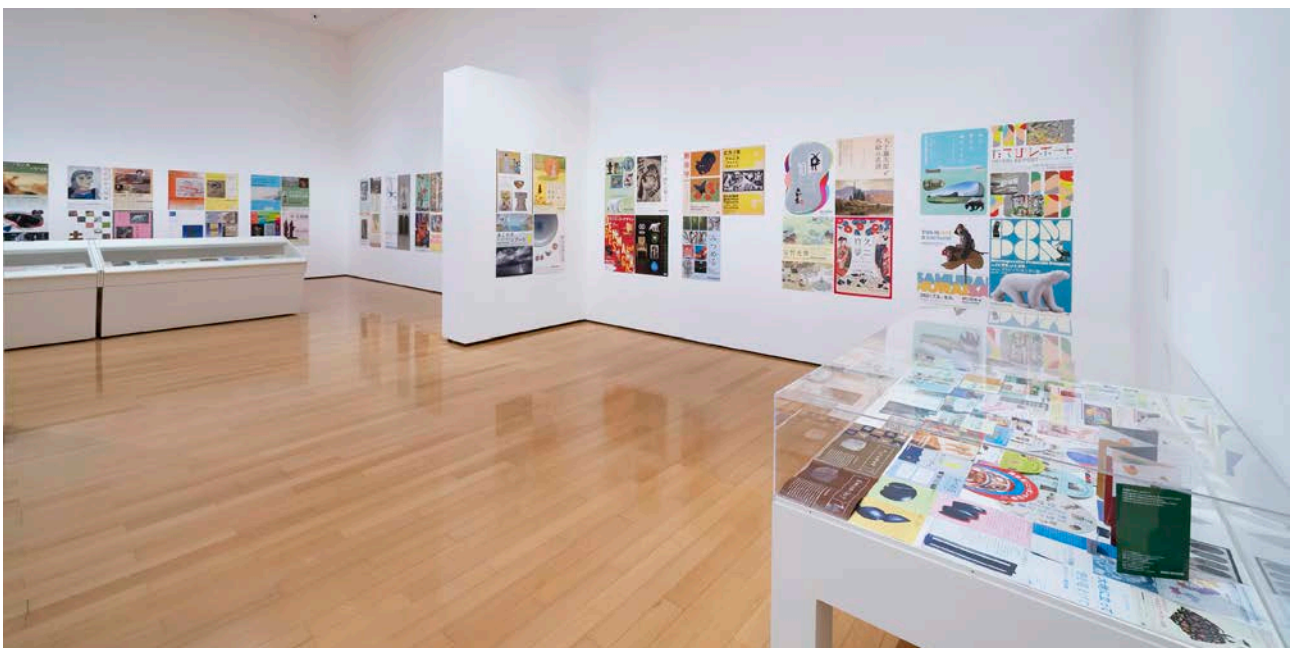


2001年の開館記念特別展以降、当館では年4回程度の企画展・コレクション展を開催してきており、本展は79回目の展覧会であった\*。これまでに開催した展覧会のポスターと、主なカタログやジュニアガイドなどの印刷物を展示紹介し、20年の歴史を振り返った。

会場では2021年春のコレクションによる展覧会「水に浮かぶ島のように」開催時に作成した、当館の展覧会の歴史を紹介する動画を上映した。

また、当館の展覧会をきっかけに誕生し、收藏された作品として、西村陽平が当館の過去の展覧会図録を焼成して作成した作品を紹介した。

\*「群馬県立館林美術館 20年の記録」(2021年)より



## Twitter 企画 #私のたてびイチオシ写真

当館では初めての試みとして、Twitter を活用し、美術館利用者と交流する企画を実施した。投稿者がこれまでに撮影した館林美術館やその周辺の画像とそれに関するコメントを Twitter に「#私のたてびイチオシ写真」と付けて投稿してもらい、1 アカウントにつき1 点を企画展会場にて A4 サイズに印刷し展示を行うというものであった。当館の SNS アカウントは広報のみで活用していたが、多方向から楽しむ展覧会として盛り込んだ企画であった。告知方法などは今後の課題となった。

8 月から会期中まで合わせて 18 件の応募があり、撮影者それぞれの視点から写された写真は美術館の景観の良さを伝えてくれるものとなった。



## 印刷物

展覧会の印刷物はデザイナーの本間亮氏 (Grotesk) がデザインし、ポスター、チラシ、招待券の他、会場で無料配布するジュニアガイドを作成した。本展の見所となった山口晃、安部泰輔、星素子の 3 人の作家を取り上げつつ、明るく楽しいイメージとなることを目指した印象的なロゴデザインは、展覧会を盛り上げる重要な役割を果たした。印刷物イメージは看板等でも活用した。

また、安部泰輔、星素子はそれぞれの展示やイベントについての個別チラシを安部は美術館スタッフが、星は作家自身がデザインし、手刷り印刷により作成した。



ポスター



ジュニアガイド

デザイン：本間亮 (Grotesk)  
制作：erA



安部泰輔チラシ



星素子チラシ  
\*カラー版は作家が自主制作

## 安部泰輔 ハヤシガモリ

<sup>あべたいすけ</sup>  
安部泰輔は、参加する展覧会場の近くに住み込みで滞在し、会期中休まず会場内で公開制作を行う作家である。古着を切り貼りしてミシンをかけ、ぬいぐるみの作品を作る。今回は、近隣の方に持ち寄ってもらった古着を天井から吊して「木」に見立てて、「林」を制作した。

1日10名まで参加できるワークショップ(参加費千円)では、参加者が描いた絵から、安部がぬいぐるみの作品を制作し、「木」になる「実」として飾り、展覧会終了後に「収穫」して参加者に送った。総参加数は259件であった。また、今回は館林美術館をイメージしたキャラクター「ハヤシちゅん」をぬいぐるみのバッジにし、展示室の内外に展示したり、美術館スタッフが着用することで、来館者が美術館の様々な場所に目を向けてもらいツールとした。このバッジはミュージアム・ショップでも販売し、作品が美術館外にも拡散することを試みた。

安部はこのほかにも、会期中に回顧展への貸出のため不在となっていたフランソワ・ポンポンの作品をモチーフに、石に絵を描いた《ポンポンコロコロ》を美術館内各所(展示室外)に展示し、来館者が作品を探しながら美術館内外を巡る仕掛けとした。

●協力 館林市日本遺産プロジェクト、山岸織物

群馬県立館林美術館のためのフランドロ-インク2020Taisuke Abe (安部泰輔) 「ハヤシガモリ」

市民から募集した古着を縦に繋ぎ会場の天井から数10本吊すことで林をイメージした空間を構成。会期中作家がミシンを持ち込み毎日10名参加者が描いたドローイングを元に古着を素材としたヌイグルミのオブジェを公開制作するワークショップを展開。出来あがたオブジェは糸と併せて古着の木々や壁に設置され日々増殖し参加者の展覧会としても機能する作品は糸と併せて会期終了後参加者に返却され館内の林のイメージは日々併せて外に広がり大きな森へと変化していくプロジェクト型のインスタレーション!!



### 展覧会開催まで

#### ●古着集め

安部作品の素材となる古着は、美術館の屋外に臨時開設した収集所へ直接搬入する形で7、8月に5回募集を行い、延べ52件の持込みがあった。

集める古着は「ご家庭でいらなくなった古着(下着、セーター、靴下、スーツ、ジャケットは作品として使用できないため、除く)で洗濯したもの」とした。



最終日(8月28日)に集まった古着

#### ●日本遺産・館林紬との連携

安部は今回、館林の「林」をイメージしたキャラクター「ハヤシちゅん」を制作したが、地域の特徴から着想を得た「サトヌマチゅん」も考案した。担当学芸員から日本遺産に認定されている3つの沼をモチーフにすることを提案し、試作品を館林市日本遺産プロジェクトの担当者に見せたところ、7月に日本遺産へ追加認定された館林紬の布を使用するプランが浮上した。協力を快諾して下さった山岸織物から布地の提供を受け、制作された「サトヌマチゅん」は9月3日(金)より館林市文化会館で先行販売を開始し、後に美術館ミュージアムショップでも販売した。



ハヤシちゅん



サトヌマチゅん

#### ●作家の滞在

安部泰輔は9月2日(木)に群馬県に入り、美術館近くに住いを借り、翌日から館内で展示の準備を開始した。前の展覧会がまだ開催中だったため、講堂を作業スペースとして、古着の選別やオブジェの制作を進めた。



# ワークショップ作品

作品完成後、展示前に安部自身が撮影した画像を  
作成日順に紹介する。

開催前に  
スタッフ、サポーターが  
見本用に作成した作品



9月24日(金)

9月20日(月・祝)

9月23日(木・祝)

9月19日(日)

9月25日(土)

9月18日(土)

9月22日(水)



10月1日(金)



10月12日(火)



10月8日(金)

10月10日(日)

9月26日(日)

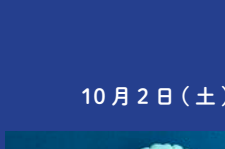


10月13日(水)



10月9日(土)

10月14日(木)



10月2日(土)



10月5日(火)



9月28日(火)

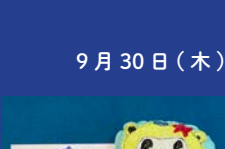
10月3日(日)



10月16日(土)



10月7日(木)



9月30日(木)



10月29日(金)

10月19日(火)

10月28日(木)  
県民の日

10月17日(日)

10月21日(木)

10月23日(土)

10月30日(土)

10月22日(金)

10月27日(火)

10月24日(日)



11月2日(火)

10月31日(日)

11月7日(日)

11月4日(木)

11月3日(水・祝)

11月6日(土)

11月5日(金)





## 関連事業

### ●しでかすおともだちがやってくる！

安部泰輔が衣装デザインを手掛けた着ぐるみアイドルユニット「しでかすおともだち」（ウーシャカ）が来館し、館内外の各所でパフォーマンスを行った。

日時：11月3日（水・祝）12:45～16:00頃



### ●里沼のいきものを館林紬で作ろう！

館林紬が『日本遺産 館林の「里沼」』の構成文化財に追加認定されたこと受け、館林市商工課からの依頼で、会期中に子どもたちに館林紬に親しんでもらうためのイベントを行った。安部は参加者の元気っ子児童クラブ（西公民館）の1年生10人に向けてビデオメッセージを作成して制作の説明を行い、児童たちには里沼のいきものを絵に描いてもらった。

その絵から、安部が館林紬の布地を使ってぬいぐるみを作成し、展示室内で展示を行った。展覧会終了後、ぬいぐるみは館林市第一資料館でも展示された。

イベント開催日時：11月1日（月） 会場：西公民館 主催：館林市商工課、山岸織物 協力：群馬県立館林美術館



西公民館での活動の様子

山岸織物の山岸美恵氏と

## 大風呂敷と広がる風景 安部泰輔

約2ヶ月間に渡る館林での生活は、いまだ不安の残る世の中の状況を、時折忘れるほどに充実したものでした。

毎朝野鳥のさえずりを聞き、木漏れ日の林道を抜け、田畑を眺めながら辿り着く先の大きな公園にある群馬県立館林美術館。

思い思いの「いきもの」を描くワークショップには、館内で働く人々やボランティアの方々、展覧会に訪れる観覧者と、内側外側に関係なく、多くの人々が参加してくれました。

参加者が描いてくれたドローイングを見ながら、素材の古着を切ったり貼ったり、オブジェを作り続けることで増え、日々変化する森のインスタレーション。

会期後には、ドローイングとオブジェは参加者全員に届けられ一人一人の暮らしの時間軸へと拡散されます。今回の作品はいわば、繋がり拡がり続けるパッチワークの風呂敷のようなものです。

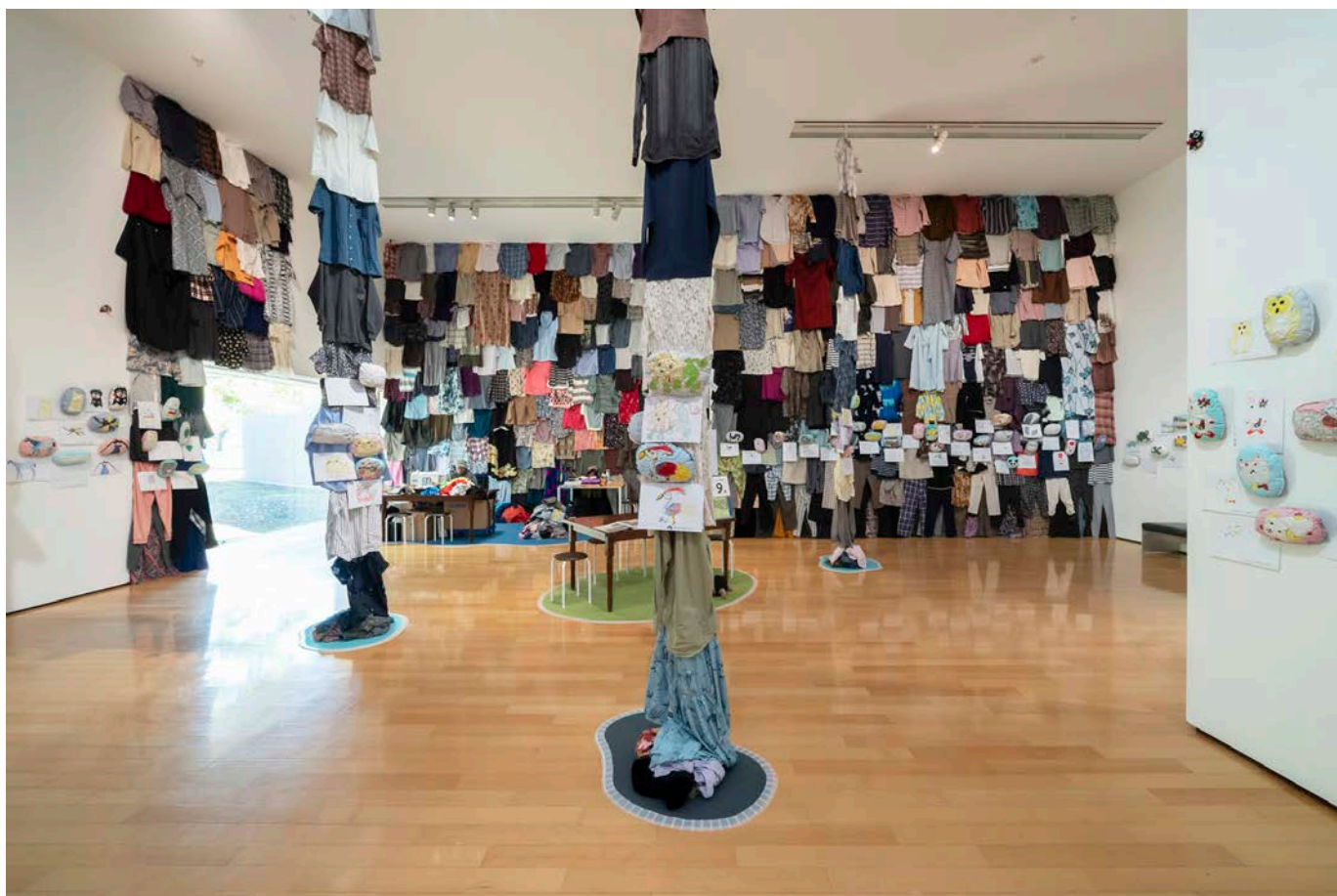
毎日の行き帰りに目にする館林の風景は、その風呂敷ではとても包めないほど大きく美しく、晴れた日に見えた富士山は、九州人にとっては嬉しい贈り物でした。



安部泰輔 ABE Taisuke 略歴

1974年、大分県に生まれる。大分在住。古着やハギレを使って小さな立体（ヌイグルミ）を制作し、そのプロセスも含めて作品とする観客参加型のインスタレーションを、日本各地で展開。会期中毎日、会場にてひたすら作り続けるという独自の制作スタイルで、全国各地の美術館やアートフェスティバルなど参加・交流型のアートプロジェクトに参加。

主な展覧会として「横浜トリエンナーレ2005」（2005年、神奈川県）、「こども+おとな+夏の美術館 まいにちアート」（2009年、群馬県立近代美術館）、「ふしぎの森の美術館」（2010年、広島市現代美術館）、「安部泰輔展 シャガール世界」（2013年、高知県立美術館）、「現在地：未来の地図を描くために [2]」（2020年、金沢21世紀美術館）などに参加している。





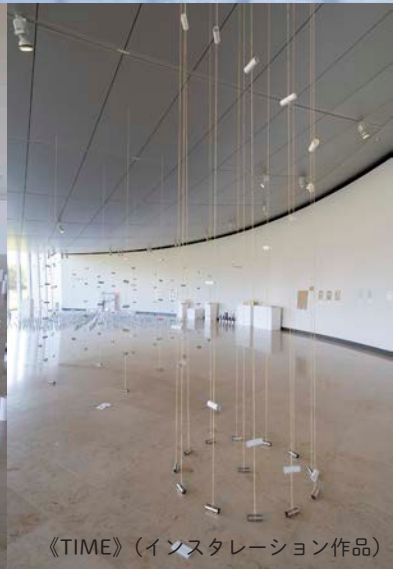
# 星素子 館林バトン&エアハグ



《館林バトン》、《お祝いロールケーキ》(参加型インスタレーション作品)



《里沼バトン》(参加型インスタレーション作品)、《洞窟》(公開制作作品)



《TIME》(インスタレーション作品)



《エアハグ 母型》



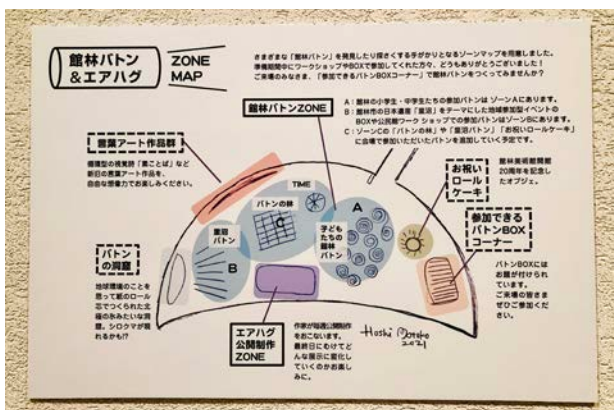
《バトンの林》(参加型インスタレーション作品)

●協力 館林市日本遺産プロジェクト、丸富製紙(株)、(株)共和、日鉄ステンレスアート(株)、(株)誠和製作所、(株)クサカベ

独自に開発した言葉アートを軸に参加型作品を開拓する星素子は、ワークショップなど地域の人々と交流するプロセスを重視した『館林バトン&エアハグ』を構想し、コンセプトの「あなたが未来に手わたしたいバトンとは？」を問いかけた。会期前（5月～9月）には、美術館と館林市日本遺産プロジェクトとの連携により、作品素材のバトン（紙ロール芯に漢字1文字と理由、余白自由）を市施設、学校、美術館で集める地域活動を行い、館林の自然や人の想いが多様に現れる《館林バトン》をはじめとする参加型インスタレーション作品を複数制作。併せて、2020年から続くコロナ禍での作品実験で開発した新ロール芯技法による《エアハグ》シリーズの公開制作、作家の背景や文脈を伝える新旧の「言葉アート」作

品を含めた約52作品で詩情あふれる空間を創った。

会期中は、来場者の誰もがバトン収集BOXで参加できる場を設け、会場の展示室1（578㎡）を緩やかにゾーニングし展開した。星は毎週末の公開制作日に適宜来場者とバトンを介したコミュニケーションを図りアート体験を醸成し、参加者から寄せられた約1800本のバトンで参加型作品に手を加え、作品を増やし、最終日まで展示をアップデートしていった。またこれまで星はバトンプロジェクトとして再利用ロール芯をバトンに見立て制作していたが、今回はコロナ禍の世情を考慮し一般参加のロール芯にはリサイクルトレットペーパー製造企業からの事前協力を得て未使用品を用い、ソーシャルディスタンスを意識した活動ならびに空間展示を行った。



「会場 ZONE MAP」作家による手描きの会場レイアウト図



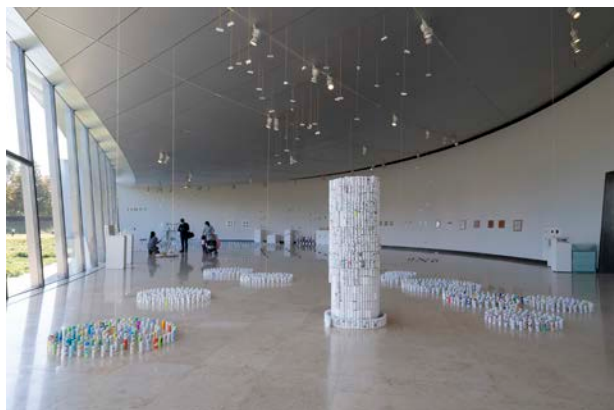
展示のイメージ作品《エアハグ - 里沼》。多々良沼で撮影



小中学生の参加バトンを作品素材とした《館林バトン》



《バトンの林》の参加バトン。対話し作家がマーブリング彩色



里沼の蓮や渡り鳥をイメージした展示風景。会期中、《お祝いロールケーキ》の裏は参加バトンで埋め尽くされた



《公開制作&ワークショップ》子どもたちとワークショップを行う星バトンは発表しあい参加型作品に追加していった

## 学校での活動

### ●概要

星は地域連携の取り組みとして学校でのワークショップ授業に注力しており、「言葉アート素ことば」（漢字の視覚詩）を軸とした対話型のエデュケーション・プログラムを開発し、講義を行っている。今回は4月初旬に一学期中に開催する事業として館林市内の小中学校に向けて①作家講師によるワークショップ出張授業 ②BOX参加（館林バトンを各校で作成し提出）を呼びかけた。①の参加希望が多かったため1校1日に限定し、希望校及び作家と調整を行い、5校16学級で出張授業を実施した。BOX参加の学年を含めた3校で②を行い、集まった計1127本のバトンを参加型インスタレーション作品《館林バトン》の素材とした。出張授業は各教室（多々良中は美術室）で開催し、星はスライドやワークシートを用いて教卓で講義。児童生徒は自席でバトンを作成し、感染対策に配慮して距離を保ち行われた。

### ●出張授業開催

6月9日（水） 館林市立第一小学校 6年生（3学級） 85名  
6月16日（水） 館林市立第五小学校 5、6年生（4学級） 104名  
6月18日（金） 館林市立美園小学校 2年生（2学級） 54名  
6月23日（水） 館林市立第十小学校 6年生（3学級） 82名  
7月6日（火） 館林市立多々良中学校 2年生（4学級） 124名

### ●収集BOXでの参加

館林市立第一小学校 1～5年 379名  
館林市立第五小学校 2～4年 158名  
館林市立第一中学校 2年、美術部員 141名



## 「館林バトン漢字収集 BOX」設置



### ●概要

事前プロセス構想の一環として「館林バトン漢字収集 BOX」を設置し、「里沼」をテーマに市民から参加型作品の素材となるバトンを募集した。館林市日本遺産プロジェクトの協力により、管轄5施設、日本遺産3沼の関連施設、加えて3沼から離れた公民館も選定した。各施設にBOX、見本、説明パネル、協力企業提供の未使用ロール芯\*、筆記具、消毒液を置き、利用者が安心して自由に参加できる配慮を行い、美術館スタッフが定期的にバトンを回収した。実施期間中には新型コロナウイルスの感染拡大に従う警戒レベルや措置適用により休館や会期変更となる施設もあった。各施設の工夫や呼びかけもあり、実施期間中14施設で、地域の自然や里沼への想いが反映された464本の参加バトンが寄せられた。

美術館内の情報コーナーでは、「群馬県立館林美術館」をテーマにBOXを設置。集まった99本のバトンは美術館20周年を記念した参加型作品《お祝いロールケーキ》に加え、展示初日から公開した。展示会中には「人と自然」「里沼」「美術館」などBOX毎にテーマを設定した参加型ゾーンを設け、996本の参加バトンが会場のBOXに集まり、会期中の公開制作日に各参加型インスタレーション作品に追加していった。

\* 地域での活動と会期中に一般の参加者が使用するロール芯は、協力企業提供の長尺製品を美術館職員がカットして使用。

●会場・実施日 \*5月15日(土)～9月5日(金)

館林市文化会館\* 館林市三の丸芸術ホール\*

館林市第一資料館\* 館林市第二資料館\*

田山花袋記念文学館\* 茂林寺\* つつじが岡ふれあいセンター\*

多々良沼野鳥観察棟\* 多々良沼ボランティアセンター\*

群馬県立館林美術館\*

館林市中部公民館 5月15日(土)～7月30日(金)

館林市三野谷公民館 6月1日(火)～9月5日(日)

館林市渡瀬公民館 6月30日(水)～9月5日(日)

館林市西公民館 8月1日(水)～9月5日(日)

館林市多々良公民館 8月1日(水)～9月5日(日) ※追加

## 公民館ワークショップ



### ●会場・対象・実施日・参加者数

館林市中部公民館「女性セミナー」7月14日(水) 14名

館林市三野谷公民館「少年教室/家庭教育学級」

7月17日(土) 8名

館林市渡瀬公民館「少年少女教室」8月7日(土) 17名

館林市西公民館(美術館で順延実施) 10月17日(日) 29名

### ●概要

公民館では「里沼」をテーマとしたワークショップを公民館で活動する市民を対象に実施した。星はスライドやワークシートを用いて、対話し発想を引き出しながら進行。幅広い年齢層の参加者は里沼や地域への想いを様々な視点で考え、1名につき4本作成した。また8月終盤に予定された館林市西公民館の回は中止になった代わりに展示会期中の10月に美術館内で見学とワークショップを実施した。

## 美術館ワークショップ



### ●名称・実施日・参加者数

「サポーター研修会」4月24日(土) 12名

「星素子言葉アートワークショップ館林バトン」10月3日(日) 6名

※展示会期中の公開制作日に適宜会場ワークショップ実施

### ●概要

4月に美術館の登録ボランティアを対象に見本バトンとBOX作成のワークショップを実施。準備作業を円滑にすすめた。展示会期中のワークショップでは密に配慮し、先着6組の申込単位で作業テーブルを分けた。実施3日前までまん延防止等重点措置適用期間であったが市内や首都圏から参加者が集った。前半は対話型ワークショップで1人4本のバトンを作成し、マーブリングで彩色。後半は会場の参加型作品に相談しながらバトンを追加した。会期中の公開制作日にも希望者にマーブリングのワークショップを行い喜ばれた。

※9月予定「事前ワークショップ」はまん延防止等重点措置適用期間となり中止。

## 新しいバトンをつくろう 星素子

私たちが暮らす地球は有形無形の多様なバトンで構成されています。生命のバトン、自然のバトン、時間のバトン、知識のバトン、技術のバトン、記憶のバトン、希望のバトン…。過去から現在、未来へ伝承される事象をバトンでイメージしてみると、普段とは異なる有り様で現在の姿が浮かんでくるようです。気候変動やコロナ禍など先が見えにくい現代に、私たち人間はどのように個々のバトンを育み、どんなバトンを未来に手わたすことができるでしょうか。今と未来を想う時、人間の想像力や意志が持続可能で多様性を認めあえるよりよい未来へのバトンを生み出す原動力になりえると洞察します。繋げたいバトンは大切に、足りないバトンや加えたいバトンがあれば新しく創ることもできるはずです。

『館林バトン&エアハグ』は、未来に手わたしたいと個々が想うバトンを作品素材としたアート装置を触媒として体験の場を一般にひらいて共に考え、よりよい未来へのバトンを創発していこうという心組みで、群馬県中之条での芸術祭や東京、パリでの試みを経て各地での有機的な展開を志向するバトンプロジェクトをベースに構想しました。自分事として考えるきっかけになるよう日常で使うロール芯をリレーのバトンに見立てています。事前プロセスでは漢字の循環型視覚詩「言葉アート素ことば」を軸に開発したエデュケーション・プログラムを用いて小中学校ワークショップ授業や地域ワークショップを行い、地域資源の里沼やSDGsの話題も交え対話や発表を重ねました。「引き出された／自分はすてきな所に住んでいると知った／館林のよさを再確認できた／大事なことを考えて表した／友達のバトンが自分とは違っていて尊敬した／地域を誇りに思った／SDGsが生活と繋がっていて驚いた／漢字は無限に面白い／元気をもらった／このワークショップ授業を大人になっても忘れたくない」等の声がワークシートに寄せられ、こうした活動事体が自身のバトンと感じました。地域バトンでは館林の豊かな自然や人、名産品や文化産業、大切にしたい想いや夢、地域縁の宇宙飛行士や里沼伝説等、この地この時期ならではのバトンが多様に生まれました。それらを内包し人の想いや関係性を詩的に可視化した空間は来場者を触発し会場でも多様なバトンが続々と誕生。さらに参加型作品に館林の二毛作のようにバトンを加えると、水辺に人が集い発展した里沼のように拡張していきました。沼の蓮花のように咲くマイバトンを見つけて家族や友達と喜びあう姿や、バトンの漢字に同じと違いや関係性を発見し「ここにはワクワクする不思議が沢山ある／癒された」等と嬉しそうに伝えてくれるマスク越しの笑

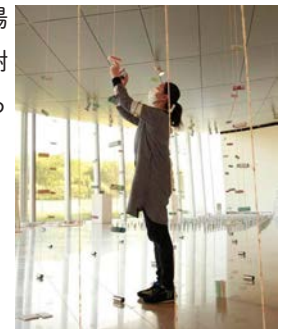
顔も印象的でした。また、身近な輪ゴム素材で世の中のテンションや関係性を表し、風の流れてくるくるバトンが動く白芯のインスタレーションは、公開制作毎に参加者と対話しマーブリングで彩色したバトンに交換していき、深まる秋の樹々のように色づきました。公開制作ゾーンでカンヴァスにロール芯を並べ始めると、人はそこに自分を投影して対話が生まれソーシャルディスタンスのように埋まっていきました。そうして、コロナ禍の日に実験を重ねあみだした技法をひらき制作した地球環境と里沼をテーマとする100号2作も完成。美術館20周年を祝う参加型作品にはアートを求め楽しむ人々を映すバトンも多数加わりました。最終日に言葉アート作品に感動したという少女が握手を求めてくれた時、思わず出した手を丸め、目と目で顔を見合いました。その手の形は、1本のバトン（ロール芯）の可能性を信じて試行錯誤したロール芯実験で生じた「ある形」を残したいと地域企業に相談し試作を重ねて完成した作品《エアハグ 母型》と同じでした。

コロナ禍で私たちは自由に人と会うことや触れることも困難な日々が続く、コミュニケーションは変容し、言葉にならない想いを抱いて生きています。作家として私はそうした言葉の前にある何かを言葉アートで表現することを探求し、開拓するほど面白い芸術を試み、人の想像する心を応援しています。閉会後に展示室1を見渡すと、自然のようなヒューマンネイチャー。そこには確かに希望がありました。皆が安心して参加できる配慮と環境でサポートいただき、共歓の時を共に創った、美術館、館林市、協力企業の方々、会場参加者の皆様に心からの感謝を。そしてあなたに、芯に残るものは種。新しいバトンをつくろうと伝えたいと思います。

会場風景動画をこちらからご覧いただけます。

星素子展示『館林バトン&エアハグ』

[https://www.youtube.com/watch?v=ybUKJRZ\\_OQI](https://www.youtube.com/watch?v=ybUKJRZ_OQI)

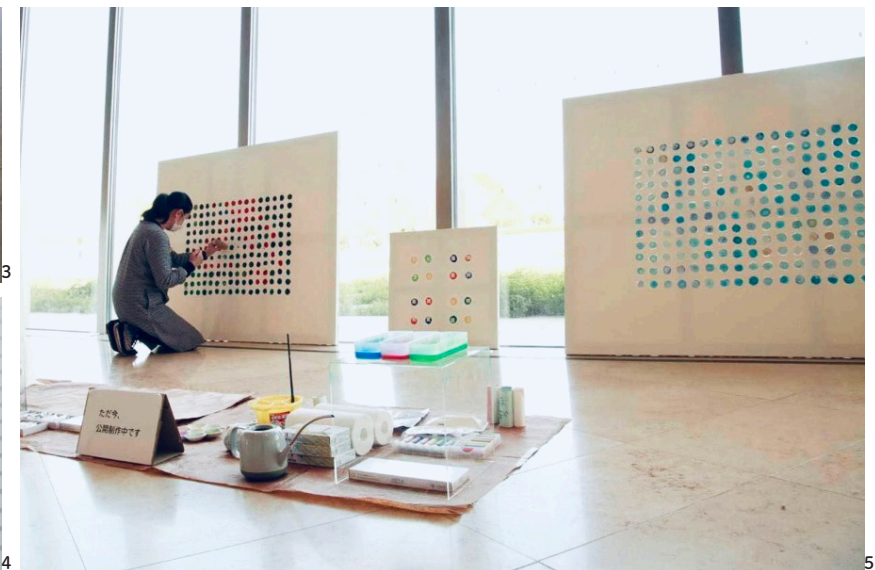
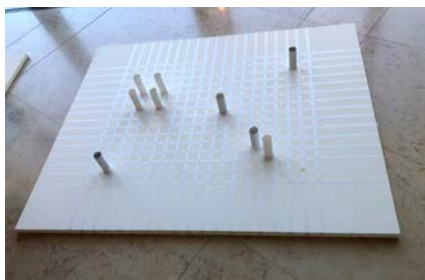
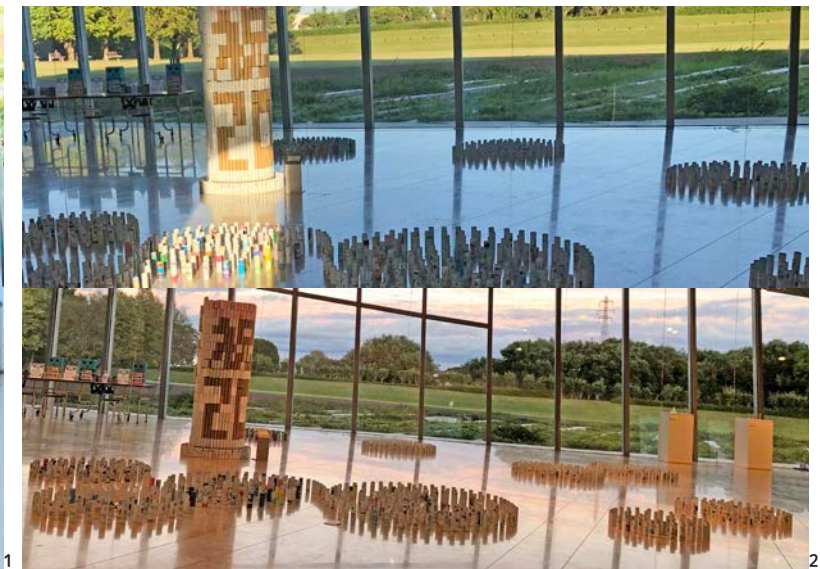


### 星素子 HOSHI Motoko 略歴

東京都在住。山口県生まれ。瀬戸内の徳山・呉で育ち、芸術と文芸の融合を志す。日本大学芸術学部文芸学科卒業。言葉を職業とする日常で生じた問いを起点に、見方や読み方を限定せず意味よりも速くイメージを伝える循環型視覚詩「言葉アート素ことば」を開発。国内外で作品展示やワークショップを重ね、地域性や普遍性の現出に着目し「コミュニケーション、場（環境・地域）、個とパブリック」をテーマに参加型アートを各地で展開。2012年英字新聞に言語的限界を超える作品性が注目掲載。2018年目黒駅前エリアにパブリックアート作品恒久設置。2019年中之条ピエンナーレ国際現代芸術祭で再利用ロール芯を未来に繋ぐバトンに見立てた地域参加型作品を発表。よりよい未来への可能性をアート思考で展望・構想し、芸術表現の開拓を試みている。



## 会場・展示作品の記録



1. 来場者が会期中毎日参加できる BOX ゾーン
2. 会場の景観や変化する光を活かすサイトスペシフィックなインスタレーション
- 3-5. 公開制作ゾーン。《エアハグシリーズ「里沼」「シロクマ」》時として来場者と対話しながら制作過程を開いて 100 号 2 作を制作  
中央は出張ワークショップ授業で選出したクラスの漢字を用いて公開制作した《館林の小学校の素ことば》
6. 作家が飲んだ空瓶で制作した RE-USE シリーズ《リサイクルバトン》
7. 自然と人をイメージした習作。右作品には「心」の文字
8. 再利用ロール芯実験から生まれた《PLAY》
9. 景観と調和する《環境バトン》
10. 気泡文字を試みた《ガラスの素ことばバトン「はっする」》
11. 2019 年パリで発表した再利用ロール芯の《川》



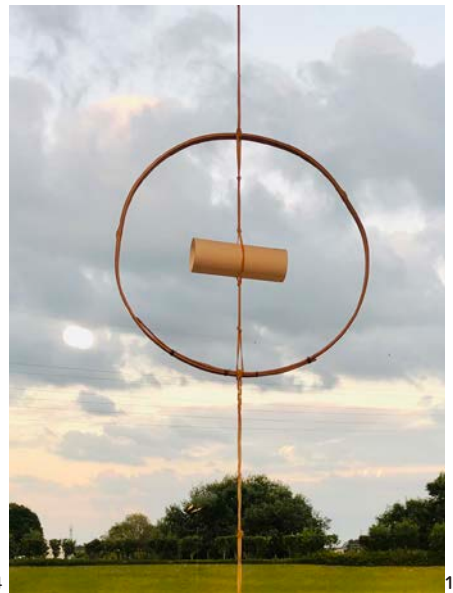
12



13



14



15



16



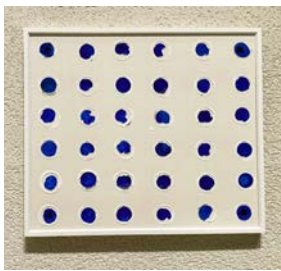
17



18



19



20



21



22



23

12. 初期の代表的キャンバス作品《WORD ART-PEACE》他 13. 震災後の新聞と引越時の段ボールを再利用《RE-USE シリーズ あした》  
 14. 日常で出会うものや想いを写真と視覚詩で表現する《お散歩シリーズ》 15. 幼少から茶道の影響を受けた星を体現するモバイル作品《移動性》  
 16.《RE-USE シリーズ 少し止まってみた。そして、走りだす。》 17.《AFTER3.11》 18.《紫陽花は空の色》 19. 言葉アート活版作品群  
 20. 新シリーズの《エアハグ - 空》 21. 象形文字「生」がモチーフ《IMA- 生きる》俯瞰写真。積層効果で横からは透明に見える  
 22. 活版作品《へのうちゅう》 23. 漫画で使われるスクリーントーンで作字した新作《言葉アート素ことば TONE 実験》



24



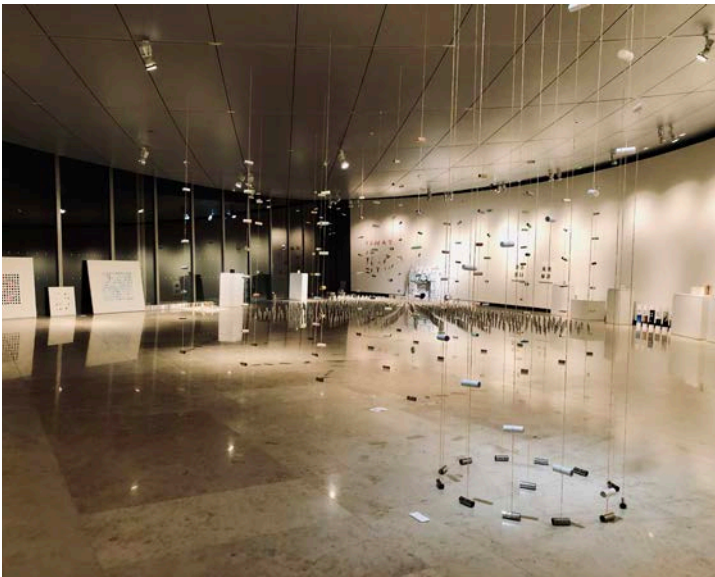
25



26



27



28



29

24. 公開制作で来場者とバトンで素ことばを制作 25. 最終日《バトンの林》で参加バトンを撮影して楽しむ来場者たち  
 26. 親子参加の漢字バトン。リピーターも多かった 27. 公開制作《洞窟》の横に《ロール芯タイポグラフィ壁画》も登場  
 28. 最終日まで約 5000 個のロール芯を用いて制作された幻想的な展示空間  
 29. 来場者に見守られ完成した公開制作作品《館林の素ことば》。手前は遠くから見ると里沼の蓮を連想させる《館林バトン》

# 出品リスト

\*リストの順番は展示順と異なります。  
\*寸法は縦×横 (cm) または高さ×幅×奥行き (cm)  
\*備考欄に記載のないものは当館所蔵 (第4章を除く)。

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法 (cm)	備考
<b>第1章 テーマで巡る、美術館のこれまで</b>						
<b>1-1 生き物の表現</b>						
1	フランソワ・ボンボン	シロクマ	1923-33	ブロンズ	12.0 × 23.5 × 5.0	
2	フランソワ・ボンボン	ボストン・テリヤ「トーイ」	1930-32	石膏	18.8 × 20.2 × 10.0	
3	ヘンリー・ムーア	羊	1960	ブロンズ	19.8 × 24.0 × 11.3	
4	ヘンリー・ムーア	後ろ足で立つ馬	1972	ブロンズ	20.0 × 9.0 × 7.0	
5	ヘンリー・ムーア	馬の頭部	1982	ブロンズ	13.6 × 12.0 × 6.5	
6	ヘンリー・ムーア	動物園の動物たち	1981-82 (1983刊)	エッチング・紙		
7		サイ		エッチング・紙	21.6 × 27.9	
8		ラクダ		エッチング・紙	21.2 × 27.8	
9		ハゲタカ		エッチング・紙	21.2 × 27.8	
10		野牛		エッチング・紙	21.2 × 27.6	
11		豹		エッチング、アクアチント・紙	25.0 × 19.5	
12		シマウマ		エッチング・紙	21.2 × 27.8	
13		ジャガー		エッチング、アクアチント・紙	21.3 × 27.8	
14		レイヨウ		エッチング・紙	21.2 × 27.8	
15		トラ		エッチング・紙	19.2 × 24.0	
16-46	パブロ・ピカソ	ビュフォン『博物誌』	1936-42 (1942刊)	アクアチント、エッチング、ドライポイント・紙		
		馬 (27.0 × 21.0)、ロバ (28.8 × 23.5)、牛 (28.0 × 21.8)、闘牛 (27.0 × 23.0、雄羊 (27.0 × 22.0)、 猫 (26.8 × 21.6)、犬 (29.6 × 24.0)、山羊 (27.6 × 21.2)、鹿 (27.5 × 21.0)、狼 (34.4 × 25.0)、 ライオン (27.2 × 21.2)、猿 (28.0 × 22.4)、シロウシ (27.2 × 22.6)、ハゲタカ (27.4 × 21.6)、 ハイタカ (29.2 × 22.0)、ダチョウ (27.0 × 21.8)、雄鶏 (26.8 × 21.0)、母雌鳥 (31.0 × 25.6)、 七面鳥 (28.0 × 23.0)、鳩 (27.0 × 21.5)、ゴシキヒワ (33.0 × 27.0)、蜜蜂 (36.5 × 28.0)、 蝶 (27.6 × 21.5)、雀蜂 (29.4 × 23.0)、伊勢エビ (27.8 × 20.8)、トンボ (26.8 × 21.0)、蜘蛛 (27.2 × 21.2)、 トカゲ (28.0 × 21.4)、ヒキガエル (28.0 × 22.2)、バッタ (27.2 × 21.6)、カエル (27.8 × 21.4)				
47	小室翠雲	蒼松壽古図・梅花双喜図	1930	絹本着色・二曲一双屏風	116.7 × 168.0	
48	バリー・フラナガン	仔象	1984	ブロンズ	174.5 × 104.1 × 62.2	
49	フェルナンド・ボテロ	馬	1995	ブロンズ	50.4 × 38.0 × 26.6	
50	イサム・ノグチ	リス	1984-88	ブロンズ板	61.0 × 48.0 × 39.0	
51	スタニスラフ・リベンスキー ヤロスラヴァ・プリフトヴァ	鳥	1997	ガラス	72.0 × 123.0 × 25.0	
52	三輪途道	猫の抜け道	2005	漆、膠、顔料・檜	25.0 × 68.0 × 14.0	寄託作品
53-57	三輪途道	発電所のなめくじ	2005	漆、膠、白土、顔料・檜 (5点組)		寄託作品
		4.0 × 6.0 × 14.0、5.0 × 8.0 × 20.0、6.0 × 9.0 × 28.0、13.0 × 10.0 × 18.0、13.0 × 10.0 × 18.0				
58	エマニュエル・コラン	ジュゴン	1991	着色・縦、ポプラ	30.0 × 140.0 × 55.0	
59	エマニュエル・コラン	大きなアザラシ	1991	着色・縦、ポプラ、ブナ	38.0 × 180.0 × 90.0	
60-79	ラウル・デュフィ	アポリネール『動物詩集あるいはオルフェウスのお供たち』	1911刊	木版・紙		
		オルフェウス (25.6 × 20.5)、亀 (20.3 × 19.3)、蛇 (20.4 × 19.4)、猫 (20.6 × 19.3)、野ウサギ (20.3 × 19.4)、 ラクダ (20.4 × 19.4)、ハツカネズミ (21.0 × 19.2)、象 (21.0 × 19.2)、毛虫 (20.4 × 19.4)、ノミ (20.4 × 19.5)、 イルカ (20.4 × 19.5)、タコ (20.2 × 19.4)、クラゲ (20.3 × 19.4)、ザリガニ (20.2 × 19.4)、白鳩 (20.3 × 19.4)、 クジャク (20.4 × 19.0)、ミミズク (20.4 × 19.0)、アイビス (20.4 × 19.4)、コンドル (20.8 × 19.4)				
<b>1-2 人について</b>						
80	バーバラ・ヘップワース	アポロン	1951	スチール・ロッド	79.0 × 110.5 × 158.5	
81	渡辺香奈	The River	2012	油彩・カンヴァス	194.0 × 1042.4 (8点組)	寄託作品
82	KYNE	Untitled	2020	アクリル、ABS レジン	32.0 × 80.0 × 52.5	寄託作品
83	ロッカクアヤコ	Untitled	2017	アクリル・カンヴァス	80.0 × 80.0	寄託作品
84	ロッカクアヤコ	Untitled	2017	アクリル・カンヴァス	140.0 × 100.0	寄託作品
85	ロッカクアヤコ	Untitled	2019	アクリル・カンヴァス	100.0 × 100.0	寄託作品
86	森田恒友	漁村図	1919-20	紙本墨画、金・軸	94.5 × 90.0	寄託作品
87	酒井三良	梨畑	1923	絹本着色・軸	82.5 × 101.2	
88	鶴岡政男	素描 (3)	1950年代	インク・紙	13.8 × 18.2	
89	鶴岡政男	素描 (4)	1950年代	インク・紙	19.0 × 26.0	
90	鶴岡政男	素描 (5)	1950年代	インク・紙	35.7 × 26.3	
91	清宮質文	葦	1958	木版・紙	21.6 × 18.7	寄託作品
92	清宮質文	九月の海辺	1970	木版・紙	13.4 × 23.4	寄託作品

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法 (cm)	備考
93	清宮質文	歲月	1970	木版・紙	18.3 × 25.8	寄託作品
94	清宮質文	入日 (版画集『暗い夕日』7)	1972	木版・紙	16.2 × 25.8	寄託作品
95	清宮質文	秋の夕日	1976	木版・紙	16.0 × 14.3	寄託作品
96	ボスコ・ソディ	立方体	2017	粘土	50.0 × 50.0 × 50.0	
97	ボスコ・ソディ	無題 (1) ~ (6)	2017-18	水彩・紙	29.0 × 20.5	

### 1-3 自然の表現を巡って

98	ピエール・アレシンスキー	手探りで	1974	エッチング、アクアチント・和紙	184.8 × 284.5	
99	カール・プロスフェルト	ヤグルマギクの花	1920年代 (2005年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
100	カール・プロスフェルト	ヒエンソウ-乾いた葉の一部	1920年代 (2003年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
101	カール・プロスフェルト	オシダ-渦巻状の若い複葉	1920年代 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
102	カール・プロスフェルト	マメ-若い羽状複葉	1920年代 (2000年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
103	カール・プロスフェルト	分枝	1920年代 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
104	カール・プロスフェルト	オオムギ	1920年代 (2003年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
105	カール・プロスフェルト	ヒヨスの萼	1920年代 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
106	カール・プロスフェルト	コエルビニアの種子	1920年代 (2000年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
107	カール・プロスフェルト	ニワトコ	1920年代 (2005年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
108	カール・プロスフェルト	マツムシソウの種子	1920年代 (2000年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	30.0 × 20.0	
109	伊庭靖子	Untitled	1995	油彩・カンヴァス	162.0 × 123.0	
110	伊庭靖子	Untitled	1995	油彩・カンヴァス	162.0 × 123.0	
111	松江泰治	YEMEN 1991 #15	1997	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.9 × 55.7	
112	松江泰治	MOROCCO 1997 #9	1993	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 55.8	
113	松江泰治	KOREA 1999 #5	1999	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.9 × 55.7	
114	松江泰治	TEXAS 1999 #61	1999	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 55.7	
115	松江泰治	ITALY 1999 #13	1999	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 55.7	
116	松江泰治	ALTIPLANO 2000 #19	2000	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.9 × 55.7	
117	松江泰治	ALTIPLANO 2000 #20	2000	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 55.7	
118	松江泰治	ARGENTINA 2000 #27	2000	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 55.7	
119	松江泰治	MONTANA 2000 #93	2000	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 55.7	
120	松江泰治	NEW BRUNSWICK 2002 #54	2002	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.7 × 58.0	
121	松江泰治	PRINCE EDWARD ISLAND 2002 #56	2002	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.8 × 55.8	
122	松江泰治	MISSOURI 2002 #63	2002	ゼラチン・シルバー・プリント・紙	44.8 × 55.8	
123	小瀬村真美	四季草花図	2004-06	映像	9分	群馬県立館林美術館友の会寄贈

### 第2章 コレクションに加わった山口晃《深山寺参詣圖》

124	山口晃	深山寺参詣圖	1994	油彩・カンヴァス	170.0 × 210.0	
125	山口晃	偽史和人伝中茸取物語	2013	ペン、水彩・紙、かるた		作家蔵
126	山口晃	東京 2020 公式アートポスター [Tokyo 2020 Paralympic Games] 「馬からやヲ射る」	2020	印刷・紙	103.0 × 72.8	
127	山口晃	《ショッピングモール》ポスター	2015	印刷・紙	51.5 × 72.8	

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法 (cm)	備考
<b>第3章 群馬県立館林美術館アーカイブ</b>						
128	西村陽平	開館記念特別展示「自然と人間」	2001 2002	焼成された紙 (展覧会カタログ)	4.5 × 28.0 × 19.0	
129	西村陽平	「ニルス=ウド-自然へ」	2002	焼成された紙 (展覧会カタログ)	9.3 × 15.5 × 13.8	

#### 第4章 美術館の今、アートを楽しむ

130	安部泰輔	ハヤシガモリ	2021	古着、ほか		
131	安部泰輔	ボンボンココロ	2021	塗料、石		
132	星素子	館林バトン&エアハグ	2021	紙ロール芯、輪ゴム、ステンレス、絵の具他		

#### 星素子展示『館林バトン&エアハグ』作品詳細リスト

No.	作品名	制作年	技法・材質
132-1	館林バトン/里沼バトン	2021	紙ロール芯、輪ゴム、ステンレス他
132-2	エアハグ-里沼	2020-21	アサンブラージュ・写真、鑄造活字、アクリルガラス、ガラス、ステンレス他
132-3	エアハグ 母型	2020/2021 再制作	ステンレス
132-4	実験 複製技術時代の素ことば (作字活字印刷・額装)	2010	デジタル印刷・紙
132-5	実験 複製技術時代の素ことば (英語・額装)	2010	熱空押印刷・紙
132-6	エアハグ-空 (エアハグシリーズ)	2020	開発ロール芯技法・絵の具、カンヴァス
132-7	バトンチャレンジ宣言	2019/2021 再制作	ステンレス
132-8	言葉は鏡のようなもの	2010	レーザー加工・ステンレス
132-9	EVERY HAPPY BIRTHDAY (お祝いロールケーキ)	2021	紙ロール芯、紙管
132-10	TIME	2021	紙ロール芯、輪ゴム、ステンレス、くず鉄
132-11	バトンの林	2021	紙ロール芯、輪ゴム、ステンレス、くず鉄
132-12	WORD ART- PEACE 素焼きの素ことば	2008-09/2010 再制作	版画、ジェッソ・カンヴァス
132-13	いただきます	2008/2009 再制作	版画、油彩・カンヴァス
132-14	(いただきます対) 実験 複製技術時代の素ことば	2009	デジタル印刷、カンヴァス・紙
132-15	どうかおねがい	2009	版画、油彩・カンヴァス
132-16	おんがく	2009	シルクスクリーン・紙
132-17	AFTER 3.11	2011-13	写真、ジクレー版画・紙
132-18	へ (うかんむり) の宇宙	2011	活版印刷・紙
132-19	RE-USE シリーズ「少し止まってみた。そして、走り出す。」	2009	コラージュ・制作過程で生じた紙
132-20	紫陽花は空の色	2015	ジクレー版画・紙
132-21	夏草と犬	2015	ジクレー版画・紙
132-22	RE-USE シリーズ「あらた」	2011-13/2014 再制作	コラージュ・段ボール紙、新聞紙、和紙
132-23	RE-USE シリーズ「たましい」	2011-13/2014 再制作	コラージュ・段ボール紙、新聞紙、和紙
132-24	RE-USE シリーズ「あした」	2011-13/2014 再制作	コラージュ・段ボール紙、新聞紙、和紙
132-25	RE-USE シリーズ「段ボール壁画 犬」	2014	開発段ボール壁画技法・段ボール紙
132-26	RE-USE シリーズ「段ボール壁画 象」	2019	開発段ボール壁画技法・段ボール紙
132-27	素ことば桐箱 (ZIX:概念解説 英語付き)	2008	木、紙
132-28	言葉アート素ことば活版シリーズ	2006-21	活版印刷・紙、懐紙
132-29	象形-生きる	2008	版画、油彩・カンヴァス
132-30	おんがく (素ことば-製本)	2013	紙、紐、木
132-31	いただきます (素ことば-萩ガラス)	2010	ガラス
132-32	お散歩シリーズ	2015	写真、デジタル印刷・紙
132-33	川	2019	開発染絵技法・植物(藍)、絵の具、紙ロール芯
132-34	IMA-生きる	2018/2021 再制作	アクリルガラス、絵の具、ガラス
132-35	生きるバトン	2020-21/ 作字 2008	ガラス
132-36	言葉アート素ことば TONE 実験「HERE WE GO」	2021	スクリーントーン・カンヴァス
132-37	言葉アート素ことば TONE 実験「GREEN CONVERSATION」	2021	スクリーントーン・カンヴァス
132-38	洞窟	2021	紙ロール芯、再利用紙箱、ステンレス
132-39	PASSAGE	2021	染絵技法・竹、紙ロール芯、絵の具他
132-40	遊-PLAY	2021	プリコラージュ・紙ロール芯、ステンレス
132-41	心	2021	紙ロール芯、輪ゴム
132-42	移動性	2019/2021 再制作	竹、紙ロール芯、輪ゴム、ステンレス
132-43	RE-USE シリーズ「リサイクルバトン」	2020-21	再利用ガラス瓶・ガラス
132-44	エアハグシリーズ「里沼」	2021	開発ロール芯技法・カンヴァス、紙ロール芯、アクリル絵の具、ジェッソ
132-45	館林の素ことば	2021	版画・カンヴァス、紙ロール芯、アクリル絵の具
132-46	エアハグシリーズ「シロクマ」	2021	開発ロール芯技法・カンヴァス、紙ロール芯、アクリル絵の具、ジェッソ
132-47	ガラスの素ことばバトン「はっする」	2020-21	アサンブラージュ・ガラス(気泡文字)、ステンレス
132-48	環境バトン	2020-21	ガラス・ステンレス
132-49	鳥	2021	紙ロール芯、輪ゴム
132-50	館林の小学校の素ことば	2021	開発技法・カンヴァス、絵の具他
132-51	ロール芯タイポグラフィ壁画「WHAT IS YOUR BATON?」	2021	解体したロール芯
132-52	館林バトン&エアハグの素ことば	2021	対話即興・カンヴァス、竹、ロール芯他

写真撮影・提供

久保貴史

表紙, p.4-6, p.10, p.17-20, p.21 中下段

安部泰輔

p.13-16

館林市商工課

p.17 下段左中

星素子

p.21 上段, p.22-27(本人写真以外)

遠藤麻生

p.24, p.25-no.5

## たてびレポート－開館 20 周年を楽しむ展覧会－

[ 展覧会 ]

会 期：2021 年 9 月 18 日 (土) - 11 月 7 日 (日)

会 場：群馬県立館林美術館 展示室 1～4

主 催：群馬県立館林美術館

協 力：館林市日本遺産プロジェクト、ミヅマアートギャラリー

担 当：熊谷ゆう子 (当館学芸員)

[ 記録集 ]

編 集・制 作：群馬県立館林美術館

執 筆：熊谷ゆう子、松下和美 (当館学芸員)、安部泰輔、星素子

印 刷：上毎印刷工業株式会社

発行日：2022 年 3 月 23 日

発 行：群馬県立館林美術館 ©2022

(群馬県館林市日向町 2003)

群馬県立館林美術館